

文 体 論

ビュフォン 著・仲島 陽一 訳

【訳者はしがき】

「文は人なり」という句は多くの人が知るものであろう。しかしこの言葉がビュフォンによることを知る人は多くあるまい。またビュフォンがどういう人物かも、いまのわが国でよく知られているとは言えないであろう。以下に訳するのはこの句の出典とされるものを含む、ビュフォンの論文である。

ビュフォン (Georges Louis Leclerc Buffon, 1707-88) はフランスの博物学者である。当時の博物学および勃興途上の自然科学の研究および教育の一つの中心であった王立植物園の園長を務めながら、浩瀚な『博物誌』(Histoire naturelle, 1749-88) を著した。地球生成論や生物進化に関する論考では宗教界とのあつれきも起こした。

フランス学士院 (アカデミー・フランセーズ) は、周知のように、十七世紀、絶対王権による中央集権を進めるルイ13世とリシュリユーの時代に、文化政策として「国語」の確立を図る意図でつくられたものである。その会員に選ばれることは、以後今日に至るまで、フランス語でものを書く者にとって大きな名誉となる。選ばれた者はその席で一席読み上げるのがしきたりであり、以下はビュフォンによるものである。彼が選ばれたのはその著作の「名文」ぶりが評価されたためであるので、彼は主題をその専門分野の内容でなく、作家家として文体から選んだと考えられる。

彼の「文体」論は基本的に古典主義的なものであり、同時代のデイドロなどの新感覚の文体観などとは対照的である。また以下でわかるとおり、「文は人なり」のオリジナルに当たる箇所の趣旨は、今日この句で意味されるものと同じとは言えないが、意味が一人歩きすることは「名文句」にありがちな運命と

(70)

いうべきであろうか。

底本は、*Buffon, Discours sur le style*, Edition publiée avec une introduction et des notes par René Nolle, 8ème édition Librairie Hachette.である。

【本文】

文体論——ド=ビュフォン氏によりフランス学士院で読まれた論文

彼の入会の日

ド=ビュフォン氏は、サンスの故大司教殿にかわってフランス学士院の
会員諸氏によって選ばれ、1753年8月25日土曜日に列席して次の論文を
読んだ

みなさん、

あなた方は私を指名して、身に余る名誉を授けてくれました。しかし、栄光が善であるのは人がそれに値する限りにおいてですし、また、技術もなく自然のもの以外の飾りもなく書かれた若干の〔私の〕試論が、あなた方の間で、敢て席を得るのに十分な資格になると私は思いません。フランス文芸の輝きをここに代表し、諸国民の声によって今日著名で、私達の子孫の口からもなお高らかに響くであろう、技術の達人で著名人であるあなた方の間に。あなた方には、私に目をつける別の動機がありました。私はずっと前から属する名誉を持つ著名な機関¹⁾に、新たな敬意のしるしを与えようと思ったのです。私の感謝は、共有されても、それで弱くなることはありません。しかしそのため今日私に課される義務をどのように果たしたらよいのでしょうか。みなさん、それはあなた方自身の富を提出するだけでよいのです。それは私があなた方の著作から汲んだ、文体に関する若干の観念です。それらが着想されたのはあなた方のものを読み、それを賛嘆することによってです。それらはあなた方の知性に服させられてこそ、それらはなんらかの成功のうちに生まれるでしょう。

言葉の力によって他の者に命じるすべを知る人々はどの時代にもいました。しかしながら、うまく書きうまく語ったのは啓発された時代においてだけです。

真の雄弁は天分の行使と精神の開発を前提とします。生まれつき口がまわるのは一つの才能に過ぎず、強い情熱、柔らかい器官、すばやい想像力を持つ者すべてに認められる性質ですが、それとは違うのです。そうした人々は感じ方が激しくて同様に心を動かし、それを外に強く表します。また純粋に機械的な印象によって、自分たちの熱狂や感動を他人に移します。物体が物体に語っています²⁾。すべての運動、すべての記号が等しく協力して奉仕します。群衆の心を動かし引っ張っていくには何が必要でしょう。他人の大部分をさえ揺り動かし説得するには、何が必要でしょう。激しく悲壮な口調、表現豊かで数多い身振り、早くて響きがいい言葉です。しかし、しっかりした頭脳、繊細な趣味、精妙な感覚を持つ、そしてみなさんのような、口調、身振り、語の虚しい響きには重きをおかない少数の人々にとっては、事柄、思想、道理が必要です。それらを提示し、軽重をつけ、秩序づけるすべを知らなければなりません。耳をうち目をひきつけることでは十分ではありません。精神に語りながら、魂に働きかけ心にふれなければなりません。

文体は自らの思想をおく秩序と運動にほかなりません。それらを密接に結びつけ締め付けるならば、文体は堅固で、いきとどいた、そしてぴったりしたものになります。もしそれらをだらだら続けるだけで、語のために結びつけるだけならば、語がどんなに優雅でも、文体は冗長で、だらしなくだらけるでしょう。

しかし、自らの思想をどんな秩序で示すかを探求する前に、最初のもくろみと主要な観念だけしかそこに入ることのない、より一般的でより定まったもう一つの秩序ができていなければなりません。ある主題が囲い込まれその広がり知られるようになるのは、この最初の計画に基づいてこうしたもくろみや観念の場所をしるすことによってなのです。この最初の下絵をたえず思い返すことによってこそ、主要な諸観念を分離する正しい間合いが決められましょうし、それを満たすのに役立つ付随的で中間的な観念が生まれるでしょう。天分の力によって、一般のおよび個別的な観念すべてがその真の観点の下に提示されましょう。とても繊細な分別によって、不毛な思想と肥沃な観念とが区別されま

(72)

しょう。書くことの偉大な習慣で得られる聡明さによって、精神のこれらの働きすべての産物が何であるか、あらかじめ感じられるでしょう。主題がほとんど広大でなく複雑でなくても、それを一目で見渡したり天分の最初の一度だけの努力で全体を見通したりできるのは、きわめて稀です。おおいに反省した後でもその関係すべてを把握することはやはり稀です。したがってどんなに専心してもし過ぎることはありません。それだけが自分の思想を固め、広め、高める方法でさえあります。省察によって中身と力とを多く与えるほど、後にこの思想を表現によってはつきりさせることが容易になるでしょう。

この計画はいまだ文体ではありませんが、その基礎ではあります。それが文体を支え、導き、運動を統べ、法則に従わせませす。それなしでは、最良の著作家も道に迷い、その筆は案内人なしに進み、不規則な線と不恰好な図とをあてずっぽうにながり書くのです。用いられる色がどんなに鮮やかでも、細部にどんな美しさが撒き散らされても、全体が気を悪くするかまたは十分に感じられないので、作品は構築されないでしょう。また作者の才気は賞賛されつつも、天分が欠けていると疑われかねません。まさにこの理由から、話すように書く人々は、とてもうまく話すとしても、へたに書くのです。自分の想像力の最初のひらめきに身を委ねる人々は、持続できない口調をとるのです。孤立した束の間の思想を失うことをおそれ、またばらばらの断片をいろいろなときに書く人々は、無理やりの一足飛びでだけそれらを結び付けるのです。要するに、寄せ集めでつくられた作品はたくさんあり、一気呵成に鑄造された作品はきわめて少ないということです。

しかしながら、主題全体は一つです。そしてどんなに広くても、ただ一つの論述に含むことができます。中断、休息、区切り³⁾が使われるべきなのは、異なる主題が扱われるときか、大きくて、骨が折れ、飛び飛びの事柄を話さなければならないので、天分の歩みが、多数の障害によって中断され、周囲の必然によって縛られるときだけでしょう。さもなければ、多数の区切りは、著作をしっかりとらせるどころか、その一体性をこわします。本は見た目にはより明るくなりますが、著者の意図は暗いままです。読者の精神に印象を与えられま

せんが、この意図が感じられるのはただ、糸のつながりによって、観念の調和した依存によって、順次の発展、漸次の推移、一様な運動によってであり、それは中断がありさえすれば破壊したり衰えさせたりするものです。

自然の作品はなぜこんなに完全なのでしょう。各々の作品が一つの全体だからであり、自然が永遠の計画に基づいて働きそこからけっして離れないからです。自然はその産物の芽を黙って準備します。生き物すべての原初形態を唯一つの行為で素描します。それを展開し、連続的な運動によって、また定められた時間において完成します。作品は人をびっくりさせます。しかし私達が驚かざるを得ないのは、それが神聖な刻印の特徴を担っていることです。人間精神は何も創造はできません。それが生み出せるのは、経験と省察によって生殖可能になってからにすぎません。認識はその生産の芽です。しかし、もし人間精神がその歩みとその働きとにおいて自然を模倣するならば、もし観想によって最も崇高な諸々の真理に高まるなら、もしそれらを結合し結びつけ、もし反省によって一つの全体、一つの体系に形づくるなら、それは揺るがぬ基礎の上に不滅の記念碑を確立するでしょう。

才人が困惑しどこから書き始めるかわからないのは、計画がないためであり、対象に関して十分に反省しなかったためです。彼は大量の観念を一度に認めます。しかしてそれらを比べず秩序付けなかったので、どれを優先すべきか決めるすべがないのです。それゆえ彼は当惑したままです。

しかし、計画をつくったときには、主題にとって本質的なすべての思想を集め秩序付けたときには、彼は筆を取るべき瞬間がたやすくわかり、精神の産物が成熟した点を感じ、その産物を急いで孵化させようとし、書く喜びしか持たないでしょう。諸々の観念がたやすく相次ぎ、文体は自然で自在でしょう。この喜びから熱が生まれ、いたるところに広がり、各々の表現に命を与えるでしょう。すべてがだんだん活気付くでしょう。口調が高まり、対象が色鮮やかになるでしょう。そして感情が光に加わり、光を増やし、それをより遠くに運び、言っていることからこれから言うことへとそれを移すでしょうし、文体は興味深く光に満ちたものになるでしょう。

(74)

いたるところに奇抜な表現をおこうとする欲望ほど、熱に対立するものではありません。一体となって一著作内に一様に広がるべき光に最も対立するあの閃光は、言葉を互いにぶつけて力づくで引き出され、幾分かの間はまぶしいが後には闇の中に私達を放り出すだけのものです。それは対置によってしか輝かない思想です。対象の一面だけを示し、他のすべての面を影に入れるのです。そしてふつう選ばれるこの面は、人が容易に才気をふるえる一点、ある角度であるだけに、良識ある人が事物を考察するのを習いとする際の大局からそれだけ人を遠ざけがちです。

真の雄弁に何よりもずっと対立するのは、こうした凝った思想の使用と、こうしたべらべらと薄っぺらで軽い観念の探求であって、それは、鑄造貨幣のように、硬さを失ってはじめて光沢を得るのです。だから、この安光りする才気を著作に盛り込むほど、著作はたくましさも光も熱も文体も減らすでしょう。この才気がそれ自体主題の中身であるなら、また作家の目的が冗談でしかないならば別ですが。そうしたときにはつまらぬ事柄について言う技術が、重大なことを言う技術よりもけだし難しくなるでしょうが。

自然な美しさに何よりも対立するのは、日常茶飯事を独自のあるいは派手なやり方で骨を折って表現することです。それ以上に作家を墮落させるものではありません。多大な時を費やし字句を新たに組み合わせて誰でも知っていることしか言わない作家は、崇められるどころか哀れまれます。これは、教養はあるが不毛な精神の持ち主の欠点です。言葉は豊富でも観念がありません。それゆえ彼等は言葉にあくせくし、語句を配列したから観念を組み合わせたと思ひ込み、本義からそらすことで言語を腐敗させたときそれを純化したと思ひ込むのです。そうした作家は文体を持たず、あるいはいうなればその影しか持ちません。文体は思想を刻み付けなければなりません、彼等は言葉を撫で付けることしかできません。

うまく書くためには、それゆえ自分の主題をすっかりわがものにしなければなりません。自分の思想の秩序を明晰にみとり、その脈絡、その一点ごとが一つの思想を表す一つの連環を形づくるためには、それを十分に反省しなければ

ばなりません。また筆をとったならば、この最初の素描の上を順々に進めて、そこから遠ざかってはならず、力を入れ過ぎたり抜き過ぎたりしてはならず、たどるべき空間によって定められた以外の動き与えてもなりません。そこにこそ文体の厳しさがあり、それがまた文体の統一をつくり、その簡潔を統制することになりましょう。またそのことだけで、文体が正確にして単純、一様にして明晰、生き生きして一貫したものになるために十分でしょう。天分によって命じられるこの第一の規則に、繊細さと趣味、表現の選択に関する細心さ、事柄を最も一般的な用語によってだけ名づける注意が加わるなら、文体は高貴さを得るでしょう。更にまた最初の動きに対する警戒、一切の派手でしかないものへの軽蔑、曖昧と冗談への変わらぬ嫌悪が加わるなら、文体は重々しさを、威厳をさえ得るでしょう。最後に、もし考えるように書き、説得したいことを自ら確信しているならば、この自分自身に対する誠意は、他人に対しての礼節と文体の真実とをつくりだし、まったく効果を生み出すでしょう。もしこの内的な確信が強すぎる熱狂によってしるされるのでないならば、またいたるところに自信以上の率直さ、熱以上の道理があるならば。

みなさん、あなた方のものを読むことで、あなた方が話し私に教えてくれるのは、このようにしてであると私には思われました。こうした知恵の神託を貪るように集めた私の魂は、飛び立ってあなた方のところまで高まろうとしました。虚しい努力！ あなた方はさらに言いました。規則で天分は補えない、天分がなければ規則も無用であろうと。うまく書くこと、それはまったく同時に、うまく考えること、うまく感じること、そしてうまく表すことです。才気と魂と趣味とを同時に持つことです。文体は知的能力すべての結合と行使とを前提します。文体の内容を形づくるのは観念だけで、言語の調和はその飾りに過ぎず器官の感受性だけによります。不調和を避けるには少々耳がよければ十分であり、詩人と弁論家とを読んで耳を慣らしよくしたならば、詩の韻律と弁論の言い回しは機械的に真似できるようになります。ところで模倣は何も創造したことはありません。だから言葉のこの調和は内容も文体の調子もつくらず、観念を欠く著作の中にしばしばみいだされます。

(76)

調子は文体が主題の本性にかなっていることにほかならず、けっして強いられはなりません。事柄の内容自体から自然に生まれ、思想を向けた一般性の点において依存するでしょう。最も一般的な観念に高まり、また対象自体が偉大ならば、調子は同じ高さまで上るようにみえるでしょう。またもし、調子をこの高みに保って、天分が各々の対象に強い光を与えるに十分なものを提出するならば、もし色彩の美を素描の力に加えるならば、要するに、もし各々の観念を生き生きしてよく規定されたイメージで表し、一続きの観念を調和して動く一幅の絵に仕上げることができるならば、調子は高尚であるだけでなく崇高になるでしょう。

みなさん、ここでは規則よりも応用がものを言うでしょう。教訓よりも実例によって教えられるでしょう。しかし、みなさんの著作を読むことで私をあんなに夢中にさせた崇高な文章を引くことが許されていないので、反省を加えるだけにせざるを得ません。うまく書かれた著作だけが、後世に残るものでしょう。知識が多くても、事実が独特でも、新発見でさえあっても、不滅を確実に保証はしません。それらを含む著作がつまらぬ対象にしかかかわらなければ、趣味、高貴さ、天分なく書かれているなら、いずれは滅びるでしょうが、なぜなら、知識、事実、発見はたやすく押しのけられ、移し変えられ、もっと巧みな人々による作品の中に入れられて、値打ちが上がりさえします。これらの事柄は人間の外にありますが、文体は人間そのものです⁴⁾。それゆえ文体は取り去られたり移されたり変えられたりはできません。もし文体が高尚で高貴で崇高なら、著者もまたいつまでも賞賛されるでしょう。なぜなら真理だけが持続的で永遠でさえあるからです。ところで立派な文体が実際にそうであるのは、それが表す無数の真理によってだけです。そこにみいだされる知的な美しさのすべて、それを構成しているすべての関係と同じ数だけの真理があり、それらは人間精神にとって、主題の内容をつくり得る真理と比べ、同じくらい有用であり、またたぶんもっと貴重です。

崇高⁵⁾は偉大な真理の中に見出されません。文芸、歴史、および哲学はみな同じ対象を、そしてとても偉大な対象、人間と自然を持っています。哲

学は**自然**を叙述し描出します。文芸はそれを描写し美化します。人々をも描写し、大きく見せ、誇張し、英雄と神々を創作します。歴史は人間しか描写せず、あるがままに描写します。こうして歴史家の口調が崇高になるのは、最も偉大な人々の肖像をつくる時、最も偉大な行為、最も偉大な運動、最も偉大な革命を示すときだけでしょう。また他のいたるところでは彼は威厳と重みを持つことで十分でしょう。哲学者の口調がいつでも崇高になれるのは、**自然**の諸法則、諸存在一般、空間、物質、運動と時間、魂、人間精神、感情、情念について語るときでしょう。それ以外では、彼は高貴で高尚であれば十分でしょう。しかし弁論家と詩人の口調は、主題が偉大であれば常に崇高でなければなりません、なぜなら彼等はその主題の偉大さに、好むだけの色彩、運動、幻影を加えられるからです。また対象を常に描写し常に大きくしなければならぬので、いたるところで全力を用い、自らの天分の範囲全体を発揮しなければならないからです。

【注】

- 1) 科学学士院。ビュフォンは1733年から所属。
- 2) 「物体」と訳したのはcorpsである。前文の「純粹に機械的な」などを考慮してこの解釈=訳を選んだが、もしかすると「集団」かもしれない。
- 3) 「ここで言ったことにおいて、私は〔モンテスキューの〕『法の精神』を念頭においたが、これは内容に関してはすばらしく、区切りが多すぎるということしか非難できなかった著作である」。〔原注〕
- 4) これが、日本語では「文是人なり」と表される言葉の出典箇所である。みて文脈からわかるとおり、ふつうその句で意味されることと著者の意図とは同じでない。
- 5) 周知のように「崇高」の概念は、バークとカント以降は変わった。ここではそれ以前の、偽ロンギノスやボワローによる古典主義美学の「崇高」である。